

書評

釘貫亨著

『動詞派生と転成から見た古代日本語』

駒走 昭 一

本書は、著者が一九九六年に発表した『古代日本語の形態変化』の続編とも言えるもので、前著の特に文法史に関する研究を発展的に展開させたものである。表題にある「古代日本語」とは、八世紀以前の上代語を含む奈良時代語から十一世紀の平安時代語までを指す。著者は、共時態復元のための十分な資料が整い始めた八世紀を「日本が文明化を達成した時期」と捉え、「このような時代は言語も変動」し、「日本人にとっての古典古代語形成期であった」と見る。そしてその言語変動の最大の要因が「動詞の機能の変化にある」と見極め、動詞増殖の特徴と本質を説明しようとする。序章で語られた「動詞が変わると文法が変わるのである」(2頁)という言葉が本書の内容を端的に象徴しているように思われる。では、順にその中身を見ていくことにしよう。

第一章「上代語尊敬語尾スの消長」は、奈良時代以前

の一時期に発達したあと平安時代以降に衰微したス語尾尊敬動詞に注目し、その消長を古代語動詞の派生と増殖過程の中で論じたものである。『古事記』『日本書紀』の歌謡に加え『万葉集』から語幹増加型ス語尾動詞と「タマフ」「イマス」等の補助動詞を用いた尊敬表示の用例を収集し、それらの数を対照させる。『万葉集』の用例収集に際しては、その巻次と表記体裁に従って六つのテクスト群に分類した上で、時代的な変遷も見通し、そこから『万葉集』では語幹増加型ス語尾動詞の高い造語力が維持されていたことを確認する。さらにその内部においても初期万葉および民衆歌における両者の出現傾向が記紀歌謡に比較的近似し、後期万葉では補助動詞型が優勢に分布する状況を明らかにしている。複雑な位相を含む万葉集を一括するのではなく、万葉学の成果を援用しつつ分類する手法は手堅く納得のいくものである。

また、敬意表現に溢れ、万葉歌と成立時期がほぼ一致

する「宣命」からも用例を収集し、そこでの使用実態が、平安和文の述語尊敬の特徴と類似していることを明らかにする。そして「宣命」という厳肅性を備えた儀式的口頭言語の世界に登場した「タマフ」等の補助動詞型尊敬表示が着脱可能な離散的単位としての合理性に支えられ、表舞台で華々しく拡張して行く一方で、記録言語という表舞台からは姿を消しつつも民衆の日常語としては存続可能であった尊敬語尾「ス」は、追い打ちをかけるような自他対応第Ⅲ群形式の発達に押されて衰退せざるを得なかったと推測する。他の様々な文法事象の趨勢に鑑みても十分にあり得ることで、徹底的な用例収集と万葉学や時代背景に目配りした分析に支えられ十分な説得力を持つものである。

ただ、そうであるとするならば、この推論の鍵となっている自他対応の史的展開の議論に立ち返ったとき、新たな疑問も生じてくるように思われる。自他対応の第Ⅲ群形式は、前著『古代日本語の形態変化』によると、四段活用と下二段活用という活用の種類の違いによって自他を示し分ける第Ⅰ群形式、「ル」と「ス」という語尾の違いによって示し分ける第Ⅱ群形式の段階を経て生まれた新しい形式で、元となる動詞の語尾にさらに「ル」あるいは「ス」を付加することでその違いを表し分ける

形式である。本書ではこの第Ⅲ群形式によって出現した他動詞「寝す」「狂ほす」「会はず」等が、尊敬化語尾「ス」のついた語形に接触し、次第に駆逐していったという展開が想定されているが、では、伝統的な尊敬表示形として語尾「ス」を伴う語形が存在したにもかかわらず、この第Ⅲの自他対応システムは、なぜ、あえてそこに参入していったのであろうか。前著(313頁)によると、第Ⅲ群形式の語群の中で「ス」を付加して他動詞化したものは三六例見られるが、そのうち派生元の動詞が完全に四段活用であったものは一六例に過ぎず、半数以上は下二段等の活用をしている。それにも関わらず、これらは派生後に「逢ふ」を除いてすべて四段活用動詞となっている(岡村弘樹「上代における自他対応と上二段活用」、『国語国文』八十八―八、二〇一九参照)。つまり、第Ⅲ群形式での他動詞化は下二段活用などの動詞を四段活用化する仕組みでもあったわけである。また、このシステムでは他動詞化する際、派生元の多くの語が単に「ス」を未然形に接続するだけでなく、語幹まで巻き込んで「asu」¹という形態をとっている。下二段活用の未然形に「ス」を接続すれば「esu」となるはずで、例えば「又(寝)」から「ナス」ではなく「ネス」を派生し、「アク(明)」から「アカス」ではなく「アケス」を派生するよ

うな仕組みになっていれば、尊敬化ス語尾動詞との接触は避けられたはずである。

つまり、この他動化派生が単に「ス」を付加しただけでなく、四段活用以外の動詞の語幹にまで踏み込み「ス」という形態をとり、尊敬表示の場合と活用の種類まで一致させてしまったことに問題があったように思われるのである。当時、尊敬表示と他動詞表示は「天照らす」の例に認められるようにそれほど遠くない概念で、第二群形式のス語尾から第三群形式の他動詞標識「ス」の分出を促し、それを形態的に下支えしたのは、実は四段活用をしていた尊敬化ス語尾動詞自身だったということはないだろうか。

第二章「精神的心理的意味を表す動詞の増殖と活用助字ム」の成立」は、文法形式「ム」が意志の意味を実現する場合と推量その他を実現する場合の根本的条件を探し出すことを主な目的とする。そのために、「ム」が後接する動詞の意志性の有無と人称との関係を『万葉集』の実例から分析する。そしてそこから、意志動詞が「ム」を後接する場合には一人称意志を表示し、無意志動詞、形容動詞、形容詞の場合には動作主が三人称で話者の推量を表示するという明白な傾向を見出し、「ム」の文脈

的意味実現の主要因が、「ム」の上接語にあることを突き止めた。「ムそのものが意志・推量といった特定の意味を伴って話線上に配置されるのではなく、ムを接した述語に文脈的な意味を付与するのは、ムに上接する単語」(61頁)だったのである。いわゆる助動詞、助詞はあくまでも文脈の中にあって初めて意味を発揮するのであって、それ自体が辞書的、多義的な意味を有しているわけではないことをあらためて思い知らされる。

ただ、活用助辞「ム」は、多音節ム語尾動詞から分出されることによって成立し、その多音節ム語尾動詞が精神的心理的意味を有するものであったから、「ム」は意志・推量といった意味の表示機能を獲得したということがこの論の前提になっているが、ではなぜ、精神的心理的意味を表す多音節動詞はそもそも語尾に「ム」という形態を持っていたのかという、より根源的あるいは循環的な疑問が湧いてきてしまうが、それは問うても仕方のないことなのであろう。

第三章「話者願望表示の文法的方法と語彙的方法」は、奈良時代語における話者願望の諸形式を、通時論的に解明しようとするものである。上代語においては、文法的方法による願望表示形式に、「ナ」「ネ」「ナム」「モガモ

「テシカ」があるが、『万葉集』での調査によるとこれらはいずれも歌末、句末用法であり、一方、語彙的方法の代表格である「マクホシ」は従属節内に集中しており、対照的であるという。この事実から著者は「マクホシ」が「知的処理を経た願望表示」（87頁）、「語彙的方法による改まった願望表現」（91頁）であった可能性を指摘し、平安時代に登場する「マホシ」の出現状況を「マクホシ」の後継形式として自然な発展の様相を示している（93頁）とする。「マホシ」は『源氏物語』の使用実態から推測するに文章語表現であるとのことであるが、これも知的分析を経た「マクホシ」の後継形式と考えれば辻褄が合う。この推測は他の平安文学作品で検証しても、ごく一部の例外を除いて認めることができ、妥当な判断だと思われる。

第四章「古代語形容詞の造語機能の特徴」では、古代における形容詞が状態性表示の伝達要求に応えられるだけの語彙を備えていなかったために、それが動詞によって補われた経緯が論じられる。まず、当時の形容詞の語彙不足を明らかにするために、著者は『古事記』『日本書紀』の歌謡、『続日本紀宣命』『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』における品詞別の出現度数

を比較し、それらの中で動詞の出現が形容詞を大きく上回っていること、また、平安時代以降、ナリ型形容動詞が和歌の世界にも浸透しつつあったことを確認する。そして『源氏物語』『今昔物語集』等の散文作品でも同様の比較を行い、「形容動詞の飛躍的増加は、古代語における動詞増加の延長線上に位置づけられる。古代語を通じて形容詞は、他の用言の増産に比べて語彙が増えていなかったのではないか」（105頁）と推測する。さらに中世フランス語の例から、動詞の形容詞転成が通言語的現象である可能性を指摘し、また一般言語学の理論も適用しつつ、古代日本語の形容詞、形容動詞を他の品詞の中に位置づけようとする。常に巨視的な視点を持ち、他の言語事象との相関から一つの動態の合理的動機を探ろうとする著者らしい見解だと言えよう。

ところで、蜂矢真郷『古代語形容詞の研究』（清文堂、二〇一四）には古代語形容詞の詳細な分類があり、それらの成立過程が見事に描き出されているが、それに対してほとんど言及がないのは少し物足りなさを感じる。ただ、これはおそらく古代語形容詞にも種々の増殖機能があったが、それらは「動詞のように同じ品詞間の組織的な派生関係を見出すことが出来ない」（111頁）からであり、「形容詞は形容詞を生まない」（111頁）からなのであ

ろう。著者は「品詞内部における単語間の関係を強固にするのは、同じ品詞から派生源を得て新しい単語を作り出してゆく関係である。これによって、当該品詞の語彙体系が緊密化し緻密化するのである。同一品詞間の派生関係が単語相互の関係を組み紐のように強固にして基本語彙を形成し、単語間の形態を安定させる。」(121頁)と述べる。現に蜂矢(二〇一四)で挙げられる形容詞の派生方法はそのほとんどが「形容詞が形容詞を生」み出すようなものではない。両者の見解は何ら矛盾するものではないと言える。

古代における状態性表示の伝達要求を収容できない形容詞語彙の不足は増殖力と安定力に勝る動詞によって補われたという展開は説得力のある説ではある。ただ、結果は同じだとしても、その動機については逆の考え方もあり得るのではなからうか。すなわち、Aの欠陥を別のBが補ったという消極的なものではなく、積極的にBがAの領域を侵して、その結果としてAの拡張が妨げられたというような考え方である。現代語でも「ディスる」「バズる」のように「る」を用いた新しい動詞の産出は盛んであるが、形容詞も「チャライ」「エモい」など「い」を用いた造語法が健在である。しかし、その一方で「面白い」「おかしい」の代わりに「ウケる」「笑える」、

また「涙ぐましい」「感動的だ」の代わりに「泣ける」というような、形容詞で表現し得る情況や感情を動詞で表現する傾向は見られる。状態性表示と動詞との親和性には時代を超えた普遍的なものがあるようにも思われる。あるいは形容詞述語の不安定さということも考える必要があるのであろうか。

第五章「活用助字タリ、リ、ナリの成立と連体修飾」は、「タリ」「リ」「ナリ」がどのような文法的条件によってそれぞれ、「テアリ」「動詞連用形+アリ」「ニアリ」から分離したのかを説明しようとするものである。万葉集の使用実態から、連体修飾に「タリ」「リ」「ナリ」が集中して分布する一方で、それらの共通項である「アリ」はかなり抑制されていることを突き止めた著者は、「テアル↓タル」「アル↓ル」「ニアル↓ナル」のような縮約が連体修飾という特殊な文法的環境で強制的に行われ、存在詞「アリ」が連体修飾の機能を失ったと考える。そして、その要因は母音連続の忌避だけでなく、「タリ」「リ」「ナリ」が形容詞を標識する機能を伴って生じたためと推測する。

では、なぜ「アリ」が存在詞でありながら状態性表示の機能を獲得したのか気になるるところであるが、著者

はその答えを宣命の用例「モノニアリ」「モノナリ」に見出す。宣命において、「ニアリ」はほとんどが話者の断定用法として用いられており、日常語の反映が期待される孝謙天皇以降はナリも同様に用いられ始めている。

また万葉集においても天平期以降の歌にはこれらの用例が見られる。これらから「連体形接続の断定ナリが出現するまでは、モノナリ、モノニアリが用言にナリを接続させる機能を担っていた。連体形接続の断定ナリは、この両形式を経由して成立した可能性がある。(中略)ニアリからのナリの分離とその帰結である存在から断定への移行は、外の事態に対する話主の認識を強く押し出すモノニアリ、モノナリの語脈を媒介にして促進されたのではないだろうか」(157頁)と推察する。

そしてここからナリ形容動詞の成立へと論が展開していくわけであるが、これは著者一流の独創性が発揮された説であり、従来の通説とは異なるものである。そのため先行研究を踏まえての考察が望まれるところであった。例えば、著者自身も少し触れてはいるが、山口佳紀『古代日本語文法成立の研究』(有精堂、一九八五)。山口は静的状態を表わし得る「くニ」型的情態副詞が「アリ」を伴うことによってナリ形容動詞が発生したことを説くが、このような情態副詞の存在を先行的に考える

説に対して、本書の立場は、まず存在詞「アリ」が「ニアリ」という断定用法を獲得し、さらに「ニ」と縮約して断定の「ナリ」が生まれたことを説く。著者の説により、先行研究がどのように回収されていくのか、あるいは退けられるのか、今後の解説を楽しみに待ちたい。

また、その他にも、宣命と万葉集の表記実態の調査から「ニアリからナリが、テアリからタリが分離しつつある頃、この新形式ナリ、タリの中に仮名で転記しにくい音声融合の流動的実態があったのではないか」(168頁)と推察したり、存在表示ナルから展開したと思われる断定表示ナルの名詞修飾が、構造的には形容詞文や自動詞文を基底とする連体修飾と同じであることに注目し、そこにナリ形容動詞の歴史的成立条件を見出したりするなど、著者独自の見解が次々と披瀝され読む者を惹きつけていく。そして最終的に「口頭語における存在表示(にある)から断定表示(である)への拡大は、物事の存在を空間的動的に把握する動詞的認知から、超時間的形容詞的認知(においてある、である)への移行過程を意味するだろう。この移行が実現しつつある位置に集中して音縮約を伴ったナルが密集した。その際に、ナルは句中の述語部を形容詞化する標識として機能したはずである」(182頁)と形容動詞発生過程を総括する。

第六章「上代語動詞の形容詞転成の原初形態」では、「降る雨」「咲く花」のような、動詞が先行文脈から離脱して形容詞と同様の振る舞いをする形容詞的名詞修飾の原初形態を推論する。著者は、活用助辞「タリ」「リ」「ナリ」は文末ではなく名詞修飾という環境でこそ誕生し得たと主張する。そして特に「タリ」に注目し、『万葉集』の観察から、「自動詞＋主格名詞」の表現に「美的規範化過程を経た格調の高い概念」(194頁)の表示を認め、そこから「タリ」が介入する分詞が定着していくことを説く。『万葉集』の各例を統語的に分析し、そこから文芸的な特徴を見出した点は、『万葉集』に精通し、言語学的にも文学的にも分析が可能な著者ならではの成果であろう。

しかし、この成果が『万葉集』という韻文文献によるものであることには注意が必要ではなからうか。著者は「タリ」が介入する過去分詞には、「咲きたる花」「照りたる月夜」のような表現がまとまって出現する。これは、用いられる動詞の共通性から見て既に規範的表現として確立していた「咲く花」「照る月」のような無標識絶対分詞に類推して成立した可能性がある。文芸言語という特殊な位相が後代の談話を含めた自然言語に介入する可

能性を示唆する」(200頁)と述べるが、その規範の影響はあくまでも、和歌の中で特定の単語を用いる場合に止まるのではなからうか。自然言語の統語形式全体にまで及ぶと言い得るものなのであろうか。著者自ら、現代語においては「咲く花」「降る雪」「飛ぶ鳥」などの表現をある種の格調を籠める文脈から離れて、日常的談話文の中で使用することが少ない」(200頁)と述べているが、それらの自動詞あるいは自動詞句による名詞修飾が現代の自然な談話に介入していないように、古代語においてもそれらが「自然言語に介入する」可能性は高くないと考える方が自然ではなからうか。もっとも、著者は平安期の散文文献についても調査をし、「タリ」が動作の結果継続を表すのに最も一般的で効果的な標識であり、一般的な状態表示へ効果を發揮したと推察しているのであるが、これは「タリ」が定着した後の結果であり、定着する原因ではないはずで、上代語動詞の形容詞転成の原初形態を明らかにする直接的な論拠とはならないように思われる。形容詞の発達の解明に『万葉集』和歌の統語的分析を用いるというのは画期的で、たいへん興味深い、韻文資料という特殊性からくる物足りなさも覚え、あらためて上代語研究の難しさを思い知らされる。

ここまで、古代語文法に関する見識を持たない評者が思いつくままに放言してきた。多くの誤解があるものと思う。著者はじめ読者諸賢のご寛恕を乞う。

紙幅の都合ですべては採り上げられなかったが、序論や補論も含めて、本書には興味深い指摘、提言が随所に見られる。例えば、完了の助動詞（本書では活用助辞）

「タリ」が分詞的用法に介入しやすいのに対し、「リ」は文脈から項を引き込むことによって構文構造上に止まろうとする傾向が強いこと、一般にカリ型形容詞と呼んでいる語群はカリ型形容動詞と呼ぶべきだということ、山田孝雄の複語尾論に時代的な推移が見出せること、ラ行音は語の音節数の増加という要請に応える形で日本語史上に登場した形態であったこと、奈良朝和歌の総仮名表記が、伝承古歌、太宰府や越中での創作歌、東歌、防人歌など八世紀奈良の京人にとつての異言語接触の場で見出したこと等、本書が教えてくれることは実に多い。

著者は常に、「は、なぜ起きたのか。そして、それはなぜその時代に起きたのか」という問題提起から出発する。言語史研究は、ややもすると歴史的事実の指摘に終止することがある。せいぜいその原因究明に止まることが多い。しかしそれでは不十分で、なぜその時期にその現象が起きたのか、時代的な必然性というものを突き

止めてこそ歴史研究であらう。著者の研究は、言語変化の原動力をその内部の相関的な関係性に求めつつも、社会情勢という外的要因も視野に入れている点に一つの大きな特徴がある。言語変化の探求に外的要因を持ち込むことに対しては賛否あるかもしれない。しかし、言語活動が人間の営みである以上、言語史の解明に社会の動向を考慮するのは当然のことであると評者は考える。釘貫亨の研究には、常に人間が存在し、その営みの構成がある。後進を惹きつけてやまない所以であらう。魅力溢れる本書の登場により古代語文法の議論がさらに活性化することを願う。

△二〇一九年八月二〇日刊、和泉書院、A5判、二五二頁、

七五〇〇円＋税

（こまばしり・しょうじ／神奈川大学教授）